

谷崎潤一郎と小野賢一郎・「草汁」

——全集逸文紹介——

細江 光

かねてから探していた雑誌「草汁」全二十六号を、この度、調査する機会を得、小文ながら、谷崎の全集および単行本未収録の逸文二点を確認できたので、ここに翻刻すると共に、「草汁」を出していた小野賢一郎と谷崎との関係についても、現在分かってゐる限りのことを取り纏め、紹介して置く。

雑誌「草汁」は、「東京日日新聞」社会部記者でホトトギス派の俳人だった小野賢一郎（俳名燕子）が、大正七年五月（一日印刷、三日発行）に創刊した俳句の月刊誌（ただし、必ずしも毎月は出なかつた）で、選者は石井露月・村上鬼城・原石鼎の三人が務めた。この雑誌は、大正九年九月第二十一・二十二合併号所載・燕子の「草汁の命」にあるような事情で、同じ「東京日日」俳句欄を担当していた原石鼎に編集を任せる事に

なり、大正十年一月・二十五号所載・燕子の「みなさまへ」にあるように、二十六号（三月）からは完全に石鼎に譲渡され、同号「消息」（石鼎記）にある通り、「ヤカナ」などを統合して、五月から「鹿火屋」となった。従って「草汁」は、原石鼎の研究には欠かせぬ興味深い資料なのだが、俳句は私の専門外なので、今は詳しくは触れない。

さて、谷崎がこの雑誌に寄稿したのは、もっぱら小野賢一郎との友情からで、寄稿した二点（創刊号の『海岸から』と二号の『山上から』）も、通信文といった体のものである。恐らく、小野が、「草汁」を創刊するに当たって、少しでも花を添え、売れ行きを伸ばそうとして、友人・谷崎に寄稿を依頼したのであろう。

谷崎と小野賢一郎との交友の始まりは、小野の著書「明治・大正・昭和」（昭和四年四月・萬里閣書房）「明治篇」「瀟」の創作」の項に、（谷崎潤一郎氏と交際の始つたのは（中略）谷崎氏の三田文学の小説が発売禁止になつたので、私が向島の笹沼別荘に訪問したのが、その皮切りで（中略）二人でよく遊びもし、飲みもし、食つても歩いた。」とある事から、明治四十四年十月「三田文学」の「颯風」が発売禁止になつて間もなく、同月十一日の「東京日日」に「文壇の彗星谷崎潤一郎」として掲載されている谷崎の談話を取りに行つた時、と推定される。

二人は忽ち親しくなつたと見えて、翌明治四十五年二月には、「青春物語」に明記されているように、小野の委嘱によって、谷崎の「あくび」が「東京日日」に連載される。さらに続けて、二月、明治座合評「人の親を親て」、四〜五月「朱雀日記」、七〜十一月「羹」と、この年に限つては、「東京日日」が谷崎の作品を殆ど独占した形となっている。

恐らくこれは、一つには、谷崎が小野と極めて親密になつたせいでもあるが、主たる理由は、谷崎の「瀧田君の思ひ出」にあるように、この年「中央公論」二月号の「悪魔」を執筆した際、谷崎があまりずべらをしたために、傍陰と一年ほど仲たがひしたせいであろう。なお、この年の谷崎は、約束した原稿を

すっぱかすことが相次いでいた事にも注意しなければならぬ。各誌の予告などによれば、一月には「雄弁」と「三田文学」、二月は「スバル」に、それぞれ題未定の創作を、三月は「中央公論」に「割烹」、三月・四月は「新小説」に「凝視」、六月は「スバル」に消息を掲載する約束を破っている。これは、急に流行作家になつて注文が殺到したのに、遅筆で対応できなかつた事や、明治四十三、四年の好調期が終わり、スランプに陥つていた事、また、人気を良いことにして、原稿料を前借りしては享楽に耽つた事が原因であろう。明治四十四五年には、小野は数えの二四五、谷崎は二六七だった。まだ若い谷崎は、小野を恰好の遊び相手ともし、また、「東京日日」から金を引き出す手筈ともしたらしいのである。

明治四十五年、谷崎が憧れの京都で二ヶ月ほど遊び暮らす事が出来たのも、「青春物語」に言うように、京阪見物記（『朱雀日記』）の連載を条件に、「東京日日」から前金を貰えたからであるが、これにも小野が斡旋の勞をとつた事は、想像に難くない。

「女の世界」大正四年十月の町の蛮人「女難の谷崎潤一郎」なる記事によれば、明治四十五年の京都旅行は、谷崎が向島の「喜楽」のおかよという同い年の世若者と深い仲となり、「喜楽」

に多額の借金を作り、心中か、前橋で芸者をしているおかよの姉の元へ駆落ちする事を迫られたので、遊び友達の小野賢一郎が、「東京日日」社長に「二百円出させて、二人を京都へ旅立たせたのだ」と言う。余り信用は出来ないが、幾らか似寄りの事実もあったかも知れない。

しかし、『瀧田君の思ひ出』にあるように、樗陰の方から折れて出て、大正二年一月の『続悪魔』から「中央公論」との關係が復活すると、谷崎はたちまち「東京日日」に書かなくなる。これは、一つには、「東京日日」に載せた『あくび』や『羹』の評判が、芳しくなかったせいもあるう。

大正三年には、七月に美人大学社（書齋の荒木郁子が始めた出版社）から出た小野賢一郎の著書『新聞記者の手帳』に、谷崎潤一郎が序文を書いた事が、「帝国文学」（T3/7）に出ているが、これは未だ発見できない。

「東京日日」には、大正七年『少年の脅迫』『白昼鬼語』、八年『母を恋ふる記』、昭和二年『蓼喰ふ蟲』が連載されているが、社会部の小野とは、恐らく無関係であろう。例えば、大正七年八月二十五日『大阪毎日』薄田泣菫全集未収録書簡が遺っている。その内容は、「九月下旬から二十日間、朝鮮・中国を旅行するので、二百円貸して欲しい。旅先からの通信を

『大阪毎日』『東京日日』に連載して返却し、足りなければ小説も書くから」（『山陽新聞』1938・9・10朝刊一面記事と写真に拠る）といったもので、『朱雀日記』の時と同じ手口であるが、交渉相手は、この年三月、芥川龍之介を誘って社友とした『大阪毎日』学芸部副部長の薄田泣菫に変わっている。また、『蓼喰ふ蟲』については、学芸部の村島婦之から依頼されたものであったことが、村島の『大馬鹿三太郎の生涯』によって確認できる。小野は、昭和九年には日本放送協会に移っているので、同年の『夏菊』や十年の『聞書抄』、戦後の『少将滋幹の母』とも無関係である。

「草汁」は、従って、大正七年まで小野との交友が続いていたことを証明する珍しい資料であり、今の所、これ以降には、僅かに小野の句集『雲煙供養』（昭和十六年三月 宝雲舎）に収録されている昭和六年高野山での「親王院に谷崎君の来訪を受け共に盆踊を見にゆく（四句）」という詞書のある「踊るとて谷崎潤一郎踊らざり」などの句を確認できるだけである。

次に「草汁」に掲載された二つの文章『海岸から』と『山上から』について、注釈を加えて置く。

『海岸から』は、大正七年四月十五日付けで鶴沼から送られている。谷崎が鶴沼に住むようになったのは、『海岸から』に

よれば、持病の神経衰弱を治すためだったようである。が、終平の『懐かしき人々』によれば、千代子・せい子・鮎子が腺病質だったためでもあったようである。また、第二次「新思潮」で一緒だった和辻哲郎が、鶴沼の東屋旅館に程近い高瀬家（和辻の妻の実家）の離れに住んでいたことも、誘い水になったかも知れない。谷崎は大正六年末から、鶴沼の東屋旅館の別館の様な離れ（砂地に建った二間しかない平家）を借りる（『九月一日』前後のこと）。これは、大正七年一月七日「時事新報」によれば、平安末期の京都を舞台にした『兄弟』との二部作、及び北条義時兄弟を描く小説『毒盃』を書くためで、一、二カ月、鎌倉時代の史跡を研究し、三月頃から約一年にわたって京都生活を試みるつもりだ、と報じられている。しかし、これらの創作は構想だけに終わったらしい。『海岸から』で（『向書く気にならない』と言っているのは、この事とも関わりそう。

『海岸から』ではまた、〈浅草の活動写真や歌劇の芝居が見たくてたまらなくなる〉とも言っているが、〈歌劇の芝居〉とは、所謂浅草オペラのことである。増井敬二著『日本のオペラ』によれば、大正六年十月二十三日、浅草日本館で、石井漢・沢モリノ・河合澄子らの東京歌劇座が、「カフェーの夜」「女軍出

征」などを上演した所、爆発的な人気を呼び、浅草オペラの時代が始まった。谷崎は、そこに現れた若い日本女性の肉体とエロティシズムに直ちに反応する。大正七年七月の『梅雨の書齋から』には、既に「目下の所、我々の娯楽機関は、浅草公園の喜歌劇（浅草オペラ）と活動写真のみ。僕は浅草公園あるが為に、東京を離れることが出来ないでいる。」と書き、同年九月の『浅草公園』でも、「鶴沼に住んでいても、十日に一遍は上京して浅草公園を見て帰らなければ気が済まない。一と述べている。後の『鮫人』や『東京をおもふ』などにも、谷崎の浅草オペラへの熱い思いは、はっきり見て取れる。

次に、『山上から』は、大正七年五月十九日付けで、伊香保からのものである。題は『海岸から』に対応させたものであろう。『感情』大正六年六月号「原星の感想」及び谷崎の『晩春日記』『萩原君の印象』『伊香保のおもひで』『夏日小品』『松本藤四郎君』などから、谷崎は大正六年五月四日から十四日にかけて、初めて伊香保温泉の千明仁泉亭に行ったことが知られるのだが、翌七年にも五月四日から千明仁泉亭に滞在・執筆していた事が、大正七年五月二十日付け久米正雄宛書簡（『国文学』81号（H12・11）中谷元宣「未発表書簡紹介」）から分かる。恐らく、この時書いていたのは、『人間が猿になった話』であ

ろう。しかし、この十九日に上山草人から電報で、(急に有楽座より話あり来る六月一日より十日間「虞美人草」にて明ける事とな)(前掲久米正雄宛書簡) ったと言つて来たため、五月二十三日「時事新報」記事によれば、谷崎は伊香保で、急遽、「虞美人草」を五幕八場に脚色する作業に取り掛かったようである。しかし、この企画は、一旦、上演許可を与えた漱石未亡人が、突然、翻意し、不許可を通告して来たため、実現しなかつた(S5/7改造社版『谷崎潤一郎全集』月報3 上山草人「お世話になるばかり(下)」)。

この後、潤一郎は、鶴沼に戻り、十月から十二月まで中国旅行に旅立つのである。

なお、伊香保には、その後も大正八年五月(「新潮」T9/5精二「さだ子と彼」)、大正十二年七月(「九月一日」前後のこと)、昭和十四年二月(船橋聖一「貞腹の記」影の浪の章)、十五年九月(S16・9・1江藤きみ子宛絵葉書)、十六年八月(同)にも行ったことが分かっている。

* * *

「草汁」第一号(大正七年五月三日発行)所載

○ 海岸から

谷崎潤一郎

田舎にゐると閑静で、創作が出来さうですが、やつぱり東京へ行つて時々刺戟を受けないと、一向書く氣になりません。つくづく東京はいゝとこだと思ひますこんな海岸に居ると、淺草の活動寫真や歌劇の芝居が見たくてたまらなくなりませう。しかし持病の神經衰弱は大きに全快したやうです。妻と子供は濱邊へ防風といふ植物を採つて來て天プラにして食はせませう。

○

此の頃の陽氣になると海岸は濕っぽい南風が吹くので、頭が重くなつて、やり切れません。目下當地は桃が満開、旅館なども客が一杯で賑やかです。小生の住んでゐる家は別荘とは云へ八疊二た間の小さな家です。小生と、妻と、娘と、甚だ呑氣な三人暮らしをして居ます。ちと遊びにゐらつしやい。四月十五日(鶴沼より熊子宛)

「草汁」第二号（大正七年六月十日発行）所載

山上から

谷崎潤一郎

伊香保の新緑を見るには昨今が一番いい時です、遠く會津方面の山までも見える眺望のいい、三階の座敷から谷を瞰をろすと、天氣のいい日は青葉若葉が金色に光つて居ます。それでも東京から見るとよほど寒く、向うの高い山の上にはまだ雪が積つて居ます。さうしてちやうど山吹が満開です。二三日中に山を降りて、東京を経て今度は鶴沼の海岸の夏を迎へるのかと思ふと、それもちよいと愉快です。（五月十九日伊香保にて）

【附記】

「月刊スクリーン・ステージ」第四号新春特別号（昭和二十三年一月十日発行）に、久保田万太郎と谷崎潤一郎の対談「芸を語る」が掲載されていることを発見したので、ついでに報告して置く。

この対談は、昭和二十二年十一月、東京劇場で、菊五郎らの通し狂言「假名手本忠臣蔵」を、朝十時十五分から夜の部の最後まで、谷崎と芸術祭執行委員長の久保田万太郎と一緒に観た後、席を変えて行われたもので、司会・筆記は安藤鶴夫である。谷崎は、歌舞伎・新劇・落語・文楽・地唄・山村舞・露伴の『五重塔』など、幅広く、そして好き嫌いを隠さずに発言している、興味深い対談となっている。

なお、「月刊スクリーン・ステージ」は、安藤鶴夫の他、利倉幸一・旗一兵らが編集し、執筆者も一流所を集めていて、なかなか優れた雑誌であると思う。